



鶴川漁業協同組合厚真支所青年漁業士

Vol.26 さわぐち けんたろう
澤口 研太郎さん

海霧に包まれた闇夜にエンジン音が響きました。滑らかに力強く海面を進む漁船が、港から出航しました。家業の漁師に転職して10年あまり。同支所青年部の副部長でもあり、中堅漁師として活躍する澤口さんを訪ね、話を聞きました。

“海を守り、仲間と魅力あるまちづくりを”

生粋の厚真っ子で、上厚真小学校、厚南中学校から苫小牧市の高校に進学。卒業後、同市内の飼料工場で4年間、生産ラインの保守点検や飼料の製造を担当しました。休日に実家に帰省しては、漁師の父を手伝いました。「工場では、毎日、同じ仕事の繰り返しでした。漁業が衰退するのは寂しいと思うようになり、家業を継ごうと転職を決めました」。漁業への不安よりも、幼いころから好きだった浜厚真の海で、気心知れた人たちと働ける喜びが勝ったのだといいます。

自然繁殖した稚貝は推定約1,000t、生食用の製品に換算すると約1万tで、10年間の操業が可能と見込まれました。昨年12月からは、韓国への輸出も始まりました。「手間はかかりませんが、持続可能な循環型漁業の成果の一つです」。

主力のホタテやホッキ貝は、すべて天然です。10年先を見据えて、自然繁殖した稚貝を管理しています。ホタテの場合、前浜に約4km四方の漁場があります。漁場を複数のブロックに区切り、順番に水揚げします。捕獲したホタテの中に混じる稚貝は、水揚げ後の漁場に放流し、時間をかけて成長させます。昨年行ったホタテの資源調査では、

操船する父親の背中から仕事を学んだほか、澤口さんは出漁ごとに欠かさず「漁業日誌」を書いていきます。場所や天気、海水温、漁獲量など、細かく記しています。書きためた5年分の日誌には、漁のヒントが詰まっています。今も役立っています。

2年前に結婚して長男は1歳になり、7月には第2子も誕生する予定です。家族の存在が、澤口さんの原動力です。「人とつながりを大切にしたい」と、消防団やまちおこしグループの活動にも積極的にかかわります。仲間づくりに余念はありません。「楽しく暮らす場所に人は集まります。仲間たちと魅力あるまちにしたいですね」。

厚真で暮らす人、働く人、応援してくれる人、訪れる人・・・
みんな、みんな、ATSUMA LOVERS